

暖冬でも冬季の生育が進み過ぎず安定多収の 精麦用六条大麦新品種「さわゆたか」

大麦は暖冬年では冬季の生育が過度に進んで、出穂期が早まり栄養生長期間が短くなって穂数が不足し、寒の戻りによる幼穂凍死や花粉不稔等の凍霜害で収量が低下することがあります。気候温暖化による影響もあり、麦作期間中の寒暖差が大きい関東地域や、温暖地の中山間地ではこのような被害が発生しやすく、暖冬でも冬季の生育が進み過ぎず、安定して高収量が得られる品種の育成が求められていました。農研機構が育成した「さわゆたか」は、秋播性と晩生型の日長反応性遺伝子を持つため、暖冬でも冬季の生育が進み過ぎず、凍霜害が発生しやすい地域でも安定多収となることが期待されます。

☆ 技術の概要

1. 「さわゆたか」は、「さやかぜ」と比較して、2～3割多収です（図1）。粒が大きく、精麦白度は同程度です（表1）。
2. 「さわゆたか」の日長反応性遺伝子は「さやかぜ」と同じ晩生型で、同等の出穂期を示します（表1）。
3. 「さわゆたか」は、「さやかぜ」と異なり、低温要求性（一定の低温に遭遇した後でないと幼穂が形成されない性質）が高い秋播型です（表1）。
4. 「さわゆたか」は、「さやかぜ」よりも暖冬でも冬季の生育が進み過ぎず、出穂期が過度に早まりにくいです（図2）。
5. オオムギ縞萎縮病（Ⅰ～Ⅲ型）とうどんこ病に抵抗性を持ちます。

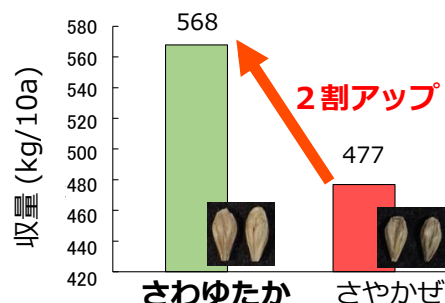


図1 「さわゆたか」の収量
(広島県現地圃場 2015～2020 年度平均)

表1 「さわゆたか」の生育、収量および品質調査成績

品種名	出穂期 (月/日)	成熟期 (月/日)	播き 性の 程度	穂数 (本/m ²)	千粒 重 (g)	整粒 歩合 (%)	搗精 白度 (%)
さわゆたか	4/16	6/1	Ⅳ	438	36.1	98.2	45
さやかぜ	4/15	6/1	Ⅰ	412	31.9	97.6	45

広島県現地圃場における 2015～2020 年度平均。
播き性の程度はⅠ～Ⅲは春播き性、Ⅳ～Ⅶは秋播き性を示す。

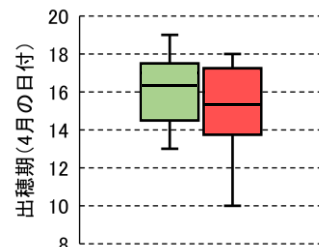


図2 「さわゆたか」の出穂期の変動
(広島県現地圃場 2015～2020 年度)

☆ 活用面での留意点

1. 赤かび病に弱いため防除を徹底してください。
2. 精麦用（ご飯など）の品種ですが、麦茶用にも使えます。
3. 根雪があるような積雪地での栽培には適しません。
4. 原種苗入手先に関するお問い合わせは、作物研究部門研究推進室（電話：029-838-8942）
にお願いします。（農研機構 作物研究部門 高橋飛鳥）